令 和 ６ 年 ３ 月 １ ８ 日
琉球大学学長選考・監察会議

国立大学法人琉球大学学長の業務執行状況の確認結果について

琉球大学学長選考・監察会議は、国立大学法人琉球大学学長の業務執行状況の確認に関する申合せ（平成３０年６月１４日学長選考会議決定）に基づき、令和５年１２月２２日に、学長の業務執行状況の確認を実施した。確認方法は、学長による業務執行状況の説明及び学長選考・監察会議委員からの質疑により行った。資料は学長が作成した業務報告書を参照した。

学長の業務執行状況の確認結果は、以下のとおりである。

記

学長は前回の業務報告書を提出した令和４年１１月１８日以降これまで、琉球大学中期将来ビジョンの「ビジョン計画」への取組を通じて、第４期中期目標・中期計画の推進及び教育研究機能等の強化に尽力している。

昨年度「琉大トランスフォーメーション（RX）」の、全学的な推進体制として RX 推進本部の整備が行われたところであるが、より一層推進するため、新たに担当の副理事・副学長を増員するとともに、全学的な機運を高めるための工夫、進捗管理又は課題の整理など、本部長として学長自ら熱心に取り組んでいる。次の１年も変革への歩みを進めるべく全力を尽くすとのことであり、期待したい。

学部教育においては、工学部工学科の入試に「女子枠」を導入し、令和６年度入試（令和５年度実施）からスタートすることとなった。全国的にも先発の取組であり、学部教育の多様化・高度化に繋げることで社会への波及効果をもたらしてほしい。

また、教育研究活動を推進するための技術支援を行う組織として、総合技術部を設置たことは、今後の教育研究力の強化及び地域貢献並びに部局横断的な取組として大いに期待したい。

国際連携に関する取組においては、「大学の世界展開力強化事業」として平成３０年度～令和４年度まで「COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成」を実施していたところ、昨年９月に「インターアイランド・サステナビリティ教育プログラム」が採択された。これらの取組は、国際的な課題を主体的に解決する人材育成を行うことに加え、大学にとって高等教育ネットワークの国際的な構築に資することもでき、意義深いものであることから、継続して実施できることは特筆すべきことである。

今回の確認においては、上述以外にも多くの新たな取り組みを開始していることを確認した他、大学構成員との積極的なコミュニケーションによるガバナンス体制構築に引き続き取り組んでいるとともに、昨年度の確認結果において特筆としていた教育研究等のプロジェクト及び各種施策についても継続的・発展的に取り組み、成果を上げていることを確認した。

以上のことから、学長は現在に至るまで、学長としてのリーダーシップを発揮し、大学構成員を目指すべき方向性に導きながら、業務を適切に執行していると認められる。

以上

【学長選考・監察会議における主な所見】

・この１年間、中期目標・中期計画に沿って着実にそして迅速に対応している。
・教育研究等の事業の他、総合技術部の設置のように斬新な取り組みも行い、成果を挙げている。
・ガバナンスの強化については、これまでの大学統治機能の強化ということではなく、利害関係者の意見を聴き取った上で、大学事業全体として認識や方向性を共有することにより改革が行われており、ガバナンス改革の最前線で努力がなされていると評価する。
・本日の報告内容以外にも琉球大学に関する資料又はデータを見る限り着実に成果を挙げており、例えば、国際共著論文の実績が上昇しているところ、責任著者としての共著率が高く、大いに評価する。
・RX プロジェクトについて、全体的に非常によい具合にプログラムが進んでいる。
・研究事業の採択などでも沖縄の琉球大学だからこそできるというものに手を挙げており、成果に繋がっていると感じている。
・新型コロナウイルス感染症の対応など、どうしてもトップダウンでやりたいような学長も多いと思うが、学長においては、丁寧に話を聞きながら進めており、その結果、４年目・５年目以降の協力体制が維持されていると思われる。
・RX と大学構成員とのコミュニケーションにこだわりをもっていると感じており、大学のスマート化をしようとしつつも、その根っこには常に人間関係とか人間同士の信頼関係があるという強い想いがあると改めて感じた。
・学長として様々な案件を抱えている中、非常に細かいところまで把握しているところもあり、かつ相談がしやすく、一緒に仕事をしやすいように考えている。
・役員や教職員との連携をしっかり取りながら、うまく人材活用して成果を出している。
・沖縄唯一の国立大学の長として地域貢献活動あるいは地域課題の解決に向けた取組もしっかり行っている。
・基本的に学長としての役割に極めて真摯で、それこそ全てが学長の役割として生活の中で一貫している。学長の行っていることが琉大にとって大きな貢献と思っている。
・RX プロジェクトは単なるデジタル化による業務改善にとどまらず、学長のリーダーシップの下で大学改革を推し進めるための体制づくりと理解しており、デジタル技術を活用した迅速な情報伝達や、課題・アイデアの共有が、本学の改革に効果的と考える。
・今回の業務報告書から、事項ごとに詳細に検証していることがわかり、多岐にわたりしっかり対応していることに敬意を表したい。
・大学のシーズを活かした商品開発やブランド化に努める等、地域貢献活動も顕著であると評価する。
・沖縄健康医療拠点としての役割について基調講演を行う等、発信力の強化に努めていることを高く評価する。